

研修の経験を次世代に フィードバック

医学部附属病院 総合診療科 専攻医

栗田 朱音 [くりた あかね]

——医学部卒業後の経緯は？

群馬中央病院で2年間の初期研修後、総合診療科の専攻医として3カ月同院で小児科研修、現在群馬大学医学部附属病院で救急科研修中です。

——「専攻医」というのは、初期研修を終え、専門研修プログラムを受けている医師のことですね。総合診療の専攻医として、研修として他の診療科の臨床現場を回っていて感じたことは？

他科の専門の先生方の考えを聞けることや、多様な診療の場で診療にあたらせていただくことで学びが多いです。

小児科では登園や登校などを気にするご家族が多く、患児の健康、周囲への感染の配慮、社会生活への配慮など、すべてのバランスを取って治療を行っていると感じ、その旨を適切にご家族に伝えるIC(インフォームド・コンセント)の仕方などは自身の診療にとっても役立っています。また、内分泌など小児科の中でも専門医に相談が必要なレベルはどの程度にあるのか、実際の診察を通して解像度が上がったと思います。

救急科では、まだ研修が始まったばかりですが、限られた時間の中でのICの仕方がとても参考になります。他に患者がいる中でのマネジメントや、目の前の患者さん自身の切迫感など、時間軸を意識して私も診察を行えるよう努めています。

——総合診療医を目指す立場として、地域医療をどう受け止めていますか。

人口当たりの医師数が相対的に多い高崎、前橋でも、医療というのは地域に根ざしているものだと思えます。

小児科、救急科で研修するなかで、診療にあたるすべての医療者は多かれ少なかれ地域に関わる——診断がつけば、あとは、地域のクリニックで定期的に検査

してもらったり薬を処方してもらう——ため、「ここから先が地域医療」と区切れるものではないと感じました。

病院機能、患者自身の生活状況など制限は多々あるなかで、単に医学的な所見だけでなく、その患者さんを多角的に評価してベストな方法を探す——教科書的にいうと全人的に捉えて診断する——ことはとてもやりがいがあります。

——本学が総合診療医の育成を強化し、入学前から卒業後までの一貫した支援体制を築くことを目指しています。先生は卒業後3年目の立場からの意見を期待されていると思います。

新設科であることも含め。私自身模索しながらの研修になりますが、私が感じた困難感を、次世代ではもっとスムーズに研修できるようなフィードバックをしていけたと思います。

またこの事業を推進することにより、総合診療科の知名度が上がり、研修の際に現場のスタッフ含めお互いにもっとスムーズにやりとりができるようになればよいと願っています。

——抱負をひとこと。

研修を通じて良き医師像を模索してまいります。

